The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第５回臨床哲学フォーラム　「人の生と研究をめぐる倫理」の特集にあたって
Author(s)	小西，真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター．2023，5，p．3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90060
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第５回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
テーマ「人の生と研究をめぐる倫理」

第５回臨床哲学フォーラム
「人の生と研究をめぐる倫理」の特集にあたって

小西　真理子

日時：2021 年 12 月 8 日（水）17:00-20:00
場所：オンライン（Zoom）

【企画趣旨】

哲学や倫理学の理論をもってある具体的な状況に言及するとき、その理論の有用性が示されることもあれば、その理論によって思考の可能性が開かれることもある。しかし、その具体的な状況を生きている人びとや、その人たちとかかわる人びとから、そのような思考方法そのものが反発を受けることもある。また、その思考方法の探求に終始するあまり、実在する人びとが単なるネタとして扱われることで、倫理的問題が生じることもあるようにも思われる。そのような問題と切り離しがたい研究や学問を司る大学とも関わりがあると同時に、人の生を大切にする臨床哲学は制度的にはどのようにあるべきなのか。本フォーラムでは、理論と接する一面をもつ研究というものが、人の生と接するときの倫理について考える。

【プログラム】

17:00-17:10　趣旨説明、登壇者紹介：【司会】小西真理子（大阪大学）
17:10-17:50　発表１：「ロボット発言事件を振り返って」堀江剛（大阪大学）
17:50-18:30　発表２：「制度としての臨床哲学」ほんまなほ（大阪大学）
18:30-18:50　休憩
18:50-19:30　発表３：「『理論の探求』と『事例』」土屋貴志（大阪市立大学）
19:30-20:00　全体討論

2021 年 12 月 8 日（水）に第 5 回臨床哲学フォーラム「人の生と研究をめぐる倫理」を開催し、大阪市立大学の土屋貴志さんをはじめ、本研究室教員の堀江剛さん、ほんまなほさんにご発表いただきました。本企画は、哲学・倫理学研究分野において、実践や現場と関わる際に求められるような研究倫理を問う必要があるのではないか（しかし、それがほとんど

公的に問われてきたことがなかったのではないか）という問題意識を背景としています。

2021 年は、①2021 年度上智大学生命倫理研究所・南山大学社会倫理研究所共催シンポジウム「これからの人文社会系の研究倫理」（開催日：2021 年 8 月 21 日（土））、②第 3 回日本哲学プラクティス学会シンポジウム：哲学プラクティス連絡会・哲学プラクティス学会共同企画「哲学プラクティスの倫理」（開催日：2021 年 9 月 5 日（日）：『思考と対話』vol.4 に記録掲載）、③第 72 回日本倫理学会ワークショップ：「＜応用＞することの倫理――緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」（開催日：2021 年 10 月 1 日（金）：『臨床哲学ニューズレター』vol.4 に特集掲載）といった哲学・倫理学分野において制度的な意味での研究倫理につきない研究者や実践者としての倫理が様々な場所で問われてきた年であったと思います。この流れを引き継ぎたいという願いも、本フォーラムの企画背景にはありました。

本フォーラムのテーマは「（哲学・倫理学分野における）人の生と研究をめぐる倫理」です。このテーマにかんして公的な議論蓄積は少ないように思われますが、実は潜在的にこの内容に高い関心をもっている研究者はいるということを、私は他でもない哲学・倫理学者より教わってきたように思います。そして、臨床哲学研究室は、人とかかわることにおいて（実践者、時に研究者批判の立場から）こういった点について考え続けてきた研究室のように思います。私は、臨床哲学という場所に出自を持たず、その外部からこの研究室に入った者ですが、だからこそ、その外部では積極的には中心的論点としてあげられている場に立ち会ったことがない事柄が、この研究室では細々と活発に言葉が取り交わされていたということに感銘を受けたというところもあります。本企画は、その取り交わしの一部について、（過去を振り返るにしても、現在、未来を問うにしても）今考えられていることを公開したいという目論みもあります。

本フォーラムでは、本研究室における臨床哲学（運動）を創ってこられ、現教員でもある堀江剛さんとほんまなほさんに過去を振り返りつつ今を問うという仕方で本テーマにいてお話しいただきました。さらに、初期臨床哲学の段階からこの研究室の活動と接点をもちつつもそれを批判的に捉えてこられ、研究倫理について複数の研究成果を出されている土屋貴志さんをお招きしました。土屋さんは、本研究室ではあまり展開されていない本テーマについての理論的な思考の提供もしていただくことができました。各論者の方々がこれまでに培われてきた豊富な思考や実践があふれ出たことで、本フォーラムの論点は多岐にわたったものになりましたが、同時に濃度の高いものになったようにも思います。また、参加者のなかには、このフォーラムに感想文をお寄せくださった方もいらっしゃいます。改めてお礼申し上げます。

2022 年度が過ぎ去り、そして、もうすぐ 2023 年度がはじまります。様々な場所で立ち上がった研究と倫理をめぐる問題意識が立ち消えないこと、むしろそれらの議論が丁寧な仕方や真摯な仕方で批判されるような未来があることを願っております。

（こにし・まりこ）